

第21回研究会（2016年1月30日）パネルディスカッションの記録

司会者（古川）：

それでは、パネルディスカッションに入りたいと思います。まずパネリストをご紹介します。向かって左手から、中野佳代子さん（元日本語国際センター参与）、国立教育政策研究所の松尾知明先生、インドネシアの教科書についての報告をエデ先生とされた上野美香さん、タイの国際キャンプについて報告されたティーラット先生、そして、当センター専任講師の坪山由美子さん、そして司会は私、専任講師の古川嘉子が務めます。

新しい資質・能力を教育に取り入れていく上で、担い手である中等教育の教師に対する研修が重要となりますので、まずは教師研修の点から話を進めたいと思います。タイ国際キャンプについて報告されたティーラット先生からうかがいたいと思います。国際キャンプでは、タイの教育省が提案する21世紀型スキル（深く考える力・他者と協働する力など）の教育目標の達成を目指しているというのですが、ティーラット先生の発表の「成果」のところ、生徒が自分をふり返ったり、新しい視点を学んでいる、いわば21世紀型スキルという点からも気づきがあることがわかりましたが、なぜそういう学びが可能となったと考えますか。

ティーラット：

これまでの日本語の授業ではこのようなスタイルの活動がなく、今までとは違った勉強の仕方だったからだと思います。通常の授業では、生徒が自分から日本語を使うということがあまりなかったのですが、国際キャンプではそれができました。

司会者（古川）：

そのような生徒の学びを起こさせるために、ファシリテーターとなる教師はどのような点に気が付けたらいいですか。

ティーラット：

生徒をサポートすること、考えさせることが大事です。ファシリテーターの教師は答えをすぐに言わない、言うのはだめです。先生が意見を言うと、生徒は引っ張られてしまいます。答えを言うのをがまんすることを教師は学んだと思います。

司会者（古川）：

そのようなキャンプの成果を、通常の授業でどのように活かしてほしいですか。

ティーラット：

少しでも自分の授業に取り入れてほしいです。通常行っている応用練習の中に取り入れることが可能だと思います。教師は生徒が答えられるまで待つてほしいと思います。すぐ答えをあげるのではなく、

生徒が答えを出す時間をあげるようにがまんしながら待つこともその一つです。

司会者（古川）：

次に「にほんご人フォーラム」の担当者である坪山さんにお話をうかがいます。「にほんご人フォーラム」というのは、国際交流基金とかめり財団が共催で2012年度から実施しているプログラムです。参加しているのは、東南アジア5ヶ国と日本の教師と高校生です。参加する生徒はさまざまなスキルを使って、多国籍の生徒から成るグループで課題に取り組み、教師はその生徒の活動を観察し、観察したことを基に他国の教師と意見交換し、その過程で教師自身も生徒同様にさまざまなスキルを使います。そして、日本語科目での授業をどうしていけばいいかを考えます。各国が求めている教育に応じた中等学校の日本語科目の在り方を考える場となっています。坪山さんは、2012年度から2015年度まで「にほんご人フォーラム」のプログラムデザインを3年間担当してきました。この試みは、タイの国際キャンプと共通するところも多いと思われます。坪山さんは、こういった資質・能力を育成する上で、教師には何が必要だとお考えですか。

坪山：

「にほんご人フォーラム」はチームで実施しましたが、チームで考え議論する中で、自分自身が問われる経験をしました。21世紀型スキルで求められていることが、どれだけ自分にあるのだろうか、と。だからこそ、試行して実践していくことが重要だと感じました。本日の発表内容は、学校教育中の日本語教育、日本語教師という視点から語られているという前提で、お話しします。

21世紀型スキルというものは、新しいことというより、過去にも求められていたことだと思います。これまでも日本語を学ぶ場合の学びの場を考えてきたし、文化を学ぶ場合の学びの場を考えてきました。これに、21世紀型スキルを加えた学びの場を考えることになったのだと思います。具体的にどう考えていくかということ、ペアやグループといった生徒のフォーメーションをどう組み合わせるのか、推測、関連付けや洞察を促す問いかけをどういうことばで行うか具体的に考え、気づきや発見を刺激する道具立てをどう工夫するかということが重要になります。先ほどのタイの国際キャンプでは、お年寄りの体験をするためにハンドクリームをぬったゴーグルなどが使われていますが、そのような道具立てを考える力が教師には必要となります。

もう1点は、エデさんが言ったような教師自身が自分の能力を高めることが必要になります。私も「にほんご人フォーラム」では、説明してしまったために抽象語として頭に入っただけで実際に結びつかないという経験を何度もしました。教師自身が、知識として抽象的に理解するのではなく、実際にどうということなのだろうかと探っていく能力や自分の実践の中から気づいていく能力が必要だと考えています。

司会者（古川）：

授業活動の設計能力が重要だというご発言でしたが、そのような教師の力を育てるために、どのよう

な研修や経験が必要と考えますか。そして、そのような教師研修をデザインし、実施する場合、何が重要でしょうか。同じような取り組みをする人も増えていく中で、実施してお感じになったことを共有していただけますか。

坪山：

私自身が「にほんご人フォーラム」を担当して感じたことは、もっと教師に気づいてほしいということです。学習者は想像もしないことをします。グループ活動をさせると自然に自分の役割を決めて活動に参加していきます。それが、偶発的か教師の仕掛けによるものなのか、教師はよく観察する必要があります。「にほんご人フォーラム」で、教師に気づいてほしいと思って作ったタスクシートがうまくいったときもあれば、そうでないときもあります。教師にうまく気づかせるのは容易ではないですが、改善していきたいと思います。

もう1点は、日本語、文化、21世紀型スキルなどいろいろな要素が入ってくると、どこに焦点をあてるのが重要になります。21世紀型スキルに相当することは、今までまったくやってなかったとは言いきれず、意識してなかっただけだと思います。学校教育では多くの科目がありますが、日本語科目だからできること、日本語科目でもできる活動についてもう少し議論が進むといいと思います。

司会者（古川）：

それでは、次に上野さんにおうかがいします。現場の先生たちにとっては、新しい考え方を理解し、実践していくのは、かなり困難が伴うのではないかと思います。その点について、上野さんはどうお考えですか。

上野：

エデ先生からも自分自身の能力を高めることが重要だと気づいたという発言がありましたように、本当の意味での理解や実践にいたるのは、かなり大変だと思います。ただ、私自身も同様でした。20世紀の教育を受けてきた自分自身にとっても思考の転換が必要でした。赴任中に成果を上げるところまではいきませんでした。むしろ、国際教育協力としての日本語教育に関わる日本人の一人として多くのことを学ぶ機会になったと言えます。

司会者（古川）：

上野さんはインドネシアに赴任されていたとき、レッスン・スタディ⁽¹⁾、日本語で言えば「授業研究」を教師研修に取り入れていらしたと聞いています。レッスン・スタディは、私の経験では、例えば米国の教育関係者など、他の国の教育界でも注目を浴びている日本発の取り組みで、教育界のクールジャパン的な事象だと考えていました。インドネシアの高校の先生方の状況と、今回のシンポジウムのテーマでもある新しい資質・能力観との関連で、レッスン・スタディの可能性についてお話しいただけるでしょうか。

上野：

インドネシアの場合、レッスン・スタディはインドネシア政府が JICA と共同プロジェクトとして進めていました。すでに 7, 8 年の実績がありました。そのため、日本人である私もレッスン・スタディを知っているだろう、一緒にやってくれと、現地の教師からサポートを頼まれたのです。これは私自身にとって、まさに 21 世紀型スキル、インドネシアでいうところの科学的アプローチと合致していました。レッスン・スタディも、生徒の学びを観察することから、教師の発問力や課題発見力が重要になりますし、参加者同士の協同あつての活動ですので、その点で新しい資質・能力観の育成と共通していたのです。

レッスン・スタディは、PLAN-DO-SEE というサイクルの中で、授業の改善を目的としてともに計画し、実践し、振り返るということを重視しています。このサイクルは新しいカリキュラムであろうが、古いカリキュラムであろうが、改善のために必要なことですが、学びあい続けていかなければ本当の意味での実現は難しいと感じました。同時に、教師研修のひとつのアプローチとしては大きな可能性を持っていると考えます。

司会者（古川）：

それでは、前半のまとめとして、松尾先生にお話をうかがいます。ティーラットさん、坪山さん、上野さんのご発言から、教育界が新しい資質・能力の獲得へとパラダイムシフトしようとしている状況がわかりました。諸外国の状況をご存じの松尾先生から、教師の教育あるいは現職教師の研修といった観点でコメントいただけるでしょうか。

松尾：

（松尾氏講演）資料の 8 ページにある上 2 枚（スライド 29・30）のスライドをご覧ください。これまでの発言を聞いて、教師自身に 21 世紀型スキルが必要な時代になったのだと感じています。8 ページの上の左側のスライド（スライド 30）は、どういった力を教師がつけていかなければならないか、つまり授業のデザイン力について述べています。右側は、Plan-Do-Check-Action という改善力について述べています。この 2 つが大切だと考えています。

もう少し付け加えると、授業デザインにはビジョンが大切です。いい授業を見ることもビジョンを磨くことになりまして、タイの実践にも見られましたが、新しいやり方を知ることで授業も変わります。教師自身が資質・能力を高めるためには、自分でしっかり勉強することも大切ですし、しっかり考えリフレクションすることも重要です。さらに、一緒になって授業を計画し、一緒になって授業を反省していく、そういう中でビジョンも磨かれると思います。

改善力についてですが、計画と実際にはどうしてもズレが生じますから、ズレをリフレクションするのが大切です。特に 21 世紀型能力の文脈で言うと、どれだけ具体的に子どもの姿で目標が描けるかが重要になります。コミュニケーション能力とか創造力とか大きな目標では実際の評価

のときに使えません。ですから、具体的に、この単元でどういう経験をして、コミュニケーション能力であればどういう力が育っていくのか目標を設計して、授業をデザインしていく必要があります。そして、実際にやってみてズレを考えて、改善します。教師の授業デザイン力と改善力を高めることが一つの方法だと考えます。

司会者（古川）：

ありがとうございました。バックワード・デザイン⁽²⁾という考え方も共通するところがあると感じました。ここまでのご発言を受けて論点をまとめるとともに、新たな視点提供を中野さんをお願いします。

中野氏：

この研究会で共有したかったことを改めてまとめてみたいと思います。日本国内においては、海外の初等・中等教育における日本語教育への関心があまり高くないという現状があります。本日、お聞きになったように、200万人以上の子どもたちが学校教育の中で日本語を学んでいます。その意味を考えたいと思います。そこで学んでいる若い人たちは、日本の人々とその国をつないでくれるきわめて重要な役割を持った人たちです。

初等・中等教育における日本語教育というのは、ほかの日本語教育とは異なる、あるいは特に留意しなければならない面があるということが本日のメッセージの一つだったと思います。それは、人間の発達段階における外国語教育であり、あくまでも「教育」の一環であるという点です。単に外国語を熟達させるだけでなく、「言語」ましてや「外国語」を扱っている意味を認識し、教育的な付加価値を高める必要があります。教育として何ができるか、教育的価値が求められています。

本日の発表からもわかるように、海外の初等・中等教育段階での日本語教育は、相手国の国民教育に関わるということです。さきほど、上野先生から教育協力という発言がありましたが、日本語科目として、あるいは相手国と日本とのつながりにおいて何が期待されているのかという点からも考えなければなりません。日本語の言語材料をいかに教えるかだけを考えると、教育的観点が抜け落ちてしまうということを共有したいと思いました。

このように、相手国の子どもたちの豊かな教育のためにお手伝いをしたいという思いもありますが、一方、私たちにとっても、日本語教育を存続させたいという思いがあります。これは外国語教育の存続に関わる問題でもあります。初等・中等教育は教育行政あるいは校長先生の裁量によるところが大きいので、日本語科目がいかに意味があるか、いかにその国の教育政策に沿って日本語教育を実施しているかということを、理路整然と説明し、わかってもらうことが重要になります。

本日取り上げたキー・コンピテンシーや21世紀型スキルといった21世紀に必要とされる新たな資質・能力観は、世界各国が共有しています。それは、ごく自然なことであり、グローバル化した同じ

世界に生きているからにはほかなりません。今回の調査で、中等教育における日本語教育が最も盛んな東南アジア各国においてもそれが確認され、見落とせないことであることが確認されました。そうした教育のパラダイムシフト、教育改革が成功するかどうかの鍵は、教師が握っており、教師研修が重要になると思います。ただ教師研修のあり方、教育実践のあり方は、まだ試行錯誤の段階にあると思います。OECD自身も、教師や学習者の負担をこれ以上大きくしないことを配慮しているようで、先日OECDの開発担当者が、「学ぶことを増やすのではなく、深い学びを起こさせる姿勢が重要だ」と言っていたことが印象に残っています。

キー・コンピテンシーや21世紀型スキルといった、21世紀に必要とされる新たな資質・能力観を学習者に身に付けさせることを、自然に実践している教師もいます。ただ今までやってきたことでも新しい文脈の中で、意識化し、体系化することが重要だと考えます。教師研修に関しては、日本語教授力の研修だけでなく、教育の在り方を扱う研修が必要だということになるのではないかと思います。

今回各国の教育文書を読む中で、世界各国が同じような教育目標を共有している一方で、各国の固有性も感じました。それぞれの国の固有の歴史、伝統、教育文化があり、その文脈のなかで、新たな教育のパラダイムを取り入れて根づかせていくには、それぞれの国で教育体系を再編成していく必要があります。それが各国にゆだねられているということもわかりました。インドネシアの教育文書の中で、コンピテンスの中にある情緒面、態度形成についての言及が興味深いと思いました。親切心、注意深さ、勇気、情熱、責任感、誠実さ、寛容さなどがあり、ルーブリックで評価される対象となっています。

これらの態度面については、これまでも大切だとはわかっていましたが、評価の対象としては違うのではないかと思われてきました。しかし、2030年の世界を想定してOECDもキー・コンピテンシーの見直しをしていると聞いていますが、その中では知識、スキルに加えての態度についても詳細な分析が行われているとのこと。現在、「人格的資質」(character qualities)が、コンピテンシーの一つとしてしっかりと位置付けられ、評価の対象になっていることはきわめて興味深いことです。

最終的には子どもたちが世界に出て行ってほかの国の子どもたちと遜色なく生きていくために、そしてできれば成功裡に生きていくために、各国がしのぎを削っているわけですが、そのときに誠実さや真面目さ、責任感といったものが重視されるということです。私たちはこれらの態度がいかに大事か経験的に知っていると思いますが、それがしっかりと意識化され日本語の授業にも入っていくという点にコンピテンシーの進化というものを感ずることができそうです。これからも注目したいところです。

最後に今回の調査で個人的に強調したいことは、この東南アジア5か国は英語以外の外国語もきちんと教育課程の中に位置付けているという点です。この点では、むしろ英語一辺倒の日本は学ぶべきだと思います。受験志向の英語と違い、むしろ第二外国語はこのような21世紀型スキルの獲得や文化理解などを取り入れて、人格形成にもつなげやすいと思います。そうすることで、外国語教育の地位

を向上させていきたいと考えます。

司会者(古川)：

中野さんの発言を受けて、松尾先生におうかがいします。全科目で新しい資質・能力の育成をしていく中で、外国語の教育、特に日本語教育に求められる役割についてのお考えをお聞かせください。

松尾：

(松尾氏講演) 資料8ページの下2枚のスライド(スライド31・32)ご覧ください。本日は、パラダイム転換ということばを使いましたが、本当はそれほど大きく転換しているわけではないと思っています。つまり、本来やらなければならないことをきちんとやってこなかった、今回は本当にやりましょうということだと思います。これまでも各学校では目指す子ども像を描いていましたが、実際にはスローガンに終わっていました。教室の中で実際にどうすればいいのかという道筋が見えていない学校も多いと思います。海外が知識・技術重視なのに比べると、日本はむしろ以前から態度も含めての全人的教育を扱ってきました。日本はそのような遺産もあり、それを引き継いでいけば良いと思います。

諸外国でも2030年ということばをよく聞きます。日本の学習指導要領も2030年を見据えていますし、アルバータ州、ユネスコ、OECDでも聞きました。21世紀に入って30年という1世代の区切りでもあり、今の小学生が成人になっているからだと思われれます。教育界では2000年ごろに全世界的に一つのブームがありました。日本の「総合的な学習の時間」の導入もその一つです。それがまた10年過ぎて、またそういうブームが来ているのかという気もします。世の中の変化が激しいのでなんとかしなければならぬという思いが世界全体に共通してあるのだと思われれます。最後に、キー・コンピテンシーや21世紀型スキルもまた、刻々と変化する時代の変化とともに絶えず見直され、進化しているものであり、固定的なものではないことを確認しておきたいと思われれます。

これから求められる外国語教育ということについては、やはり教育としての日本語ということを考えていく必要があると思われれます。日本語教育を通してどういうコンピテンシーを育てているのかということを考えることです。本日の事例を聞いて豊かな実践が展開していることがわかりました。日本語教育の本質に立ち返って、強みや弱みを洗い出すといいのではないのでしょうか。究極的には外国語教育の目標は、グローバル市民としての教育につながるものだと思います。

司会者(古川)：

皆さん、ありがとうございます。これで、パネルディスカッションを終了いたします。(以上)

注：

(1) レッスン・スタディ

「授業研究」は、1960年代から盛んになった日本の学校教育における教師間の共同による取組であるが、海外で注目され Lesson Study (レッスン・スタディ) と称されるようになった。豊田 (2009) では、「授業の改善に向けて、日々の教師が学校現場で実践している授業実践を分析・研究の対象とし、最低限校内の同僚の教師たち—多くの場合、外部の教師や教育委員会関係者も含めて—が授業を互いに見合い、分析しあい、たとえば板書の仕方、発問の仕方、指名の仕方といった片々の指導方法からはじまって、当の授業の教育内容や教材の吟味、さらには、そのときめざされた教育目標の検討までも射程範囲に入れて、共同で授業のカンファレンスを行うこの過程全体を授業研究ととらえる」(p.11) とされている。

豊田ひさき (2009) 「第1章 戦後新教育と授業研究の起源」『日本の授業研究 上巻』日本教育方法研究会編、学文社、pp.11-23

(2) バックワードデザイン

Wiggins, G and McTighe, J. (1998/2005) が提唱したカリキュラム設計論で、日本語では「逆向き設計」と呼ばれることもある。欧米を中心とした日本を含む各国の学校教育で取り入れられようとしている。その特徴は、プログラムで以下のことを三位一体で考えることである。

「求められる結果」→「承認できる証拠の決定」→「学習指導と指導の計画」

(西岡 2008:p.13 図 1-2 「逆向き設計」プロセスの三段階 より)

「バックワード」「逆向き」と言われる理由は、西岡 (2008) によれば、カリキュラムを「教育によって最終的にもたらされる結果から遡って教育を設計する」ことや、「指導が行われた後で考えられがちな評価方法を先に構想する」(p.14) ことによる。また、個別の授業で扱われる事実的知識や個別のスキルを最終的には永続的理解(「原理と一般化」)に導くような授業設計を重視する。

Wiggins, G and McTighe, J. (1998/2005) Understanding by Design. ASCD

西岡加名恵編著 (2008) 『「逆向き設計」で確かな学力を保证する』明治図書